

# CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年10月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>



## 感情の論理 vol.44 「必死になる」

先日、テレビを見ていたら、島田紳助さんがこんなことを話していました。紳助さんが母校の京都大谷高校に招かれ、講演をした時の内容です。

「お前等が今、考えなければならないのは、高校時代に精力を使わないことだ。とにかく、卒業できればいいと思え。人には人生で3年間だけ死ぬ気で頑張らなければならない時がある。こんな高校に入ったということは、今の時点では完全に負け組だ。今、死ぬ気で頑張るのはアホだ。この先に、本気でやらなければならない時のために、エネルギーを貯めておけ。その本気で頑張らなければならない時に頑張らない奴は、どアホだ!」

言葉は乱暴ですが、深い話です。

で、考えました。「死ぬ気でやるとは具体的にどういうことだろうか」と。よく、「全力でやる」とか「必死でやる」と言いますが、単なる意気込みだけなら「三日の命」でしょう。私は、そんな台詞を連発する人を信用しません。その台詞を聞いた瞬間、「ああ、この人は何もしないな」と判断します。

以前、どこかで聞いた台詞があります。

「死ぬ気の時だけ生きられる」

死ぬ気で頑張っている時だけ、生きている実感を持つという意味です。妙に共感したことを覚えています。そんなことを思い出しながら考えました。「死ぬ気」を具体的に表現することを。

そして、私なりに到達した結論は「1日の中で、あと1時間だけ、そのことに費やす時間を増やすこと」です。

1日1時間ということは1年で365時間。紳助さんの言う「3年間」が正しいかどうかは分かりませんが、それでも3年で1095時間になります。これだけあれば…本が500冊読める。

例えばですが、ある分野の専門書を500冊読めば、その道のエキスパートになれるのではないのでしょうか。確実に人生が変わります。どんな人でも、1日の中で1時間くらいは捻出できるはず。最後の手段としては睡眠時間が休日を削ればいい。その生活を覚悟して実行することが「死ぬ気」「必死」「全力」の意味だと思います。

どうか塾の業務に必死になってください。

ある塾長さんは毎日3通の「直筆の手紙」を書き続け、3年で塾生数を40人から150人に増やしました。1時間あれば出来ることです。たかが1時間、されど1時間です。

# CHUOH TRY+ANGLE

知っ得通信

2010年10月20日発行 編集・発行：中央教育研究所(株) 〒732-0811 広島市南区段原2-15-5 <http://www.chuoh-kyouiku.co.jp/>

業界  
TOPICS

## vol.19 「人材こそ塾の生命線 有能な人材を残す秘訣とは？」

### その一「限りなく危険に近いイベント」

A社では、帰属意識の高い社員のモチベーションをさらに高めるため、毎年温泉街の小さなホテルを貸し切り、「賞与の現金手渡し」を行っています。

「毎年相当額を社長以下幹部が、銀行からバッグに入れて運ぶが、現地に着くまで生きた心地がしない・・・」と社長は語るが、着いてからも油断はできません。また、手渡してからも、それぞれの社員が無事に家庭に持ち帰ってくれるかどうか心配でならないといいます。

「でも、そこまでしてやることで、社員たちは自分の労働の対価を具体的な形で知ることができるし、自分に期待してくれる会社、そして家族に対して、もっと頑張ろうという意欲をみなぎらせることができる」

### その二「負荷をかけすぎない特訓研修」

B社では、かつて塾の利益の一部を予算として、「海外研修」と称して社員を社費で海外旅行させていました。いわゆる賞与に付随した「ご褒美」でした。

「しかし、その後競合他社が増え、業界は激的な生存競争の時代となった。のんびり社員旅行している場合ではない。実質的な海外研修として、少し厳しいレベルで社員に異文化体験をしてもらうことにした」

エアコンも水道も電気、ガスもないテント生活、車ではなく馬で移動し、自分で狩猟した獲物で栄養補給する「自給自足」の生活を社員たちは体験します。

「日本の中でいくら特訓したとしても、すぐに元に戻ってしまう。しかし、海外で体験したものはそんなに簡単には消えない。日本でなら負荷をかけすぎると思われるようなことも、海外だと割と自然に受け入れてくれる」

観光ではなく体験するために海外へ行く。それは社員だけでなく塾で学ぶ生徒たちにも必要になってきているのかもしれない。

### その三「人生の山に登れ！」

C社では、毎年天候に恵まれれば、社員有志で、その地域一番の高峰に登山します。頂上近くで一泊する二日間の登山です。

「単なる登山ではなく、自分の人生のシミュレーションと考えてもらいたい。山あり谷あり、色んなことがあっても仲間がいれば意外と頑張れることもわかってほしい。また、苦勞してのぼったあと、皆で眺める景色の素晴らしさは、登った者にしかわからない・・・それは受験でも同じだから」

登るための体力づくりも大事ですが、登ったあとの体験談を生徒たちに語ることも大きな財産となります。社会一般に必要な忍耐力も養われる。登山は塾人に不可欠のスポーツかもしれません。



# 人間関係に学ぶ。

第七回「小林秀雄と北大路魯山人」



## 「日本人としての誇り」

### 「偽物じゃない『自由人』とは？」

小林秀雄が明治大学の講師になって初めて講義に出た時、檀上でいきなり煙草を吸い始めた彼は「みんなも煙草吸っていいよ。何か質問ないかな？」と言い、「乃木大将は偉い人ですか？」という学生の質問に的確に回答して、学生運動世代の若者たちのハートをがっちり掴んだといえます。「自分を必要としているなら、自由にさせろ」という彼に自由にさせた大学側も大したものですが、自分流で学生のハートを掴んだ彼も「超一流の自由人」と言えるでしょう。

風呂上りにキンキンに冷えたビールを用意していないと、その場でお手伝いさんをクビにしたという逸話を残す魯山人も、小林に負けない自由人でした。美食家として自信を持っているから、自分の料理には一切口出しをさせない。そのために完璧さを追求しました。彼のこの常識は一般人には異常に見えたのでした。

### 「飛んでる学生」

学生時代から女優の卵と同棲していた小林秀雄は、それを全く意に介さず、知己を増やし、巨匠と呼ばれる人たちとも積極的に交わりました。まさに怖い者知らずです。その精神がそのまま文芸批評にも表れましたが、批評する作品を超える作品を創り出す力を持つと認められた彼の批評は、真の実力ある作家たちに歓迎されたのでした。

三島由紀夫は「文章読本」の中で、「日本における批評の文章を樹立したのは小林秀雄である」と明言しています。これに構わず、小林秀雄はひたすら文芸批評を続けていたのでした。

魯山人がフランス料理の最高峰『トゥール・ダルジャン』で鴨料理を食べた際、「ソースが合わない」と味そのものを評価し、自ら持参したワサビ醤油で食べたと言われています。

小林秀雄のみならず、あのピカソまで容赦なく罵倒し、傲慢な態度から星岡茶寮から追放されましたが、逆に彼の天衣無縫ぶりは久邇宮邦彦様や吉田茂らかに愛されていたようです。捨てる神あれば拾う神あり、ただし才能豊かな人だけ……。

#### ◆ 小林秀雄（こばやし・ひでお 1902～1983）◆

東京神田猿樂町に生まれた。東京帝国大学文学部を卒業後、奈良の志賀直哉家に入居する。この間、女優の卵と同棲したり、中原中也や今日出海などとも交流したり自由な生き方を模索。文芸批評家として徐々に実績をつくり、1932年には明治大学に創設された文芸科に講師として就任した。1933年、川端康成などとともに『文學界』を創刊、その後編集責任者となり『ドストエフスキーの生活』などを連載。1938年、明治大学教授に昇格。1951年、『小林秀雄全集』により芸術院賞受賞。1963年、文化功労者として顕彰され、1967年文化勲章受章。1983年、腎不全のため81歳で死去。

#### ◆ 北大路魯山人（きたおおじ・ろさんじん 1883～1959）◆

京都市上賀茂出身。上賀茂神社の社家・北大路家に生まれ、六歳の時に木版師・福田氏の養子となり、京都烏丸二条の千坂和楽屋（現、千坂漢方薬局）に丁稚奉公に出る。書家を目指して中国に学んだあと、竹内栖鳳に気に入られ日本画壇の巨匠と交わる。食客として各地を転々としたあと、1921年、会員制食堂『美食倶楽部』を発足、1925年には東京永田町に『星岡茶寮（ほしがおかさりょう）』を借り受け、会員制高級料亭とした。その後、食器に使う陶器を自ら窯を作って用意して陶芸家としても著名になったが、戦後は経済的に困窮したあと、銀座に自作の直売店『火土火土美房（かどかどびぼう）』を開店、在日欧米人にも人気となり、1954年ロックフェラー財団の招きで欧米各地で展覧会と講演会が開催された。人間国宝を辞退し、1959年に肝臓ジストマによる肝硬変で死去。76歳だった。

取材／記事 : 新教育産業監修・月刊私塾界記者 千葉誠一

■ ご意見・ご要望をお待ちしています。知りたい「テーマ」や内容などについて教えてください。できるだけ対応したいと思っています。 ご連絡はこちらまで：magazine@chuoh-kyouiku.co.jp